

第 41 回 I C 国際フォーラム実施報告書

The 41st IC International Forum

令和元年 11 月 9 日（土）～ 10 日（日）

川崎市国際交流センター（神奈川県川崎市）



輝かしい共生社会のために～今、私にできること～

For a society that works for all and works together : what I can do now



Initiatives of Change
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

公益社団法人 国際 I C 日本協会
International IC Association of Japan

目次

1	目次
2	ご挨拶 矢野弘典 (国際 IC 日本協会 会長)
3	プログラム
4	ゲストスピーカーのご紹介
7	全体概要 足立 憲昭 (国際 IC 日本協会 副会長・専務理事)
8	基調講演 Mrs. Jayashree Rao
10	基調講演 Dr. A.S. Ravindra Rao
12	講演 Ms. Barbara Lawler
15	講演 綱川 章氏、幸子氏 ご夫妻
17	講演 車 光善 博士 (韓国 MRA/IC 総裁)
20	東北アジア青少年フォーラム 全体感想 成 豪哲 (国際 IC 日本協会 理事)
21	東北アジア青少年フォーラム 須崎 純史氏、石ヶ森 祐氏
23	講演 佐谷隆一 (国際 IC 日本協会 監事)
25	ワークショップ 「JAPAN I CARE」
26	参加者の感想等 (アンケートから抜粋)

[写真提供 : 弓場 睦 氏]



ご挨拶



公益社団法人 国際 IC 日本協会
会長 矢野 弘典

本日は「第 41 回 IC 国際フォーラム」にご参加いただき、まことに有難うございます。

今年は、海外から 6 名の方々がご参加くださいました。インド IC 理事のラビンドラ・ラオ博士とその奥様で環境改善を推進する「グランパリ」の活動を行っていらっしゃるジャヤシュリー・ラオ夫人、オーストラリアからインターナショナル IC 長老委員会議長のバーバラ・ローラーさん、韓国から韓国 MRA/IC 本部総裁の車光善博士、同じく韓国からチョン・ヨンヌクさん、台湾からシャオユン・リュウさん、以上 6 名の方々がです。遠路にも拘らず本当に有難うございます。

さて、私は今年の 7 月にコーで開かれた「安全への公正な統治」(Just Governance for Human Security)をテーマとした会議に出席して参りました。会議の場では、アフリカからの参加者が多く、それぞれの国の政治・経済状況から教育・貧困・労働・部族等の社会問題に至るまで、大変率直かつ赤裸々な報告がなされ、活発な意見が交わされました。この会議に出席し参加者の様々な意見を聞きながら、私は「画一性 (Uniformity) と多様性 (Diversity)」ということを考えました。

今日の世界はグローバル化が進み、世界標準という名の下に画一化を求める動きが様々な分野で益々加速しています。その一方で、国や地域、民族や文化さらには個人の持つ多様性を重視する、という動きも存在します。私たちは、こうした二つの動きを常に視野に入れておく必要がありますが、画一性には種々の問題があります。生活の便利に貢献する消費財のデファクト・スタンダードが進むことはともかく、形の上での画一化はとかく弊害を伴いますので、人や社会に対する普遍的な価値観の共有という「統一性 (unity)」を求めることが大事なのではないか、と私は考えます。

今回はテーマとして「輝かしい共生社会のために」を取り上げましたが、寛容性を持った社会、調和ある社会を築いていくという意味で、「統一性 (Unity) と多様性 (Diversity)」という観点から論議を深めてみては如何でしょうか。実り多い「国際フォーラム」となりますことを祈念しまして、開会の挨拶といたします。

以 上

***** IC と公益社団法人国際 IC 日本協会について*****

IC (Initiatives of Change 前身は MRA) とは、「自らの行動でよりよき社会を」という国際的な運動で、1938 年にイギリスで発足して以来、世界各国で信頼構築や和平に貢献してきた国連の認定を受けた非政府組織 NGO 団体 (www.iofc.org) であり、世界 60 か国以上で活動しています。

IC/MRA は戦後のドイツとフランスの和解、日本の国際社会への復帰、労使関係や貿易摩擦等の解決に貢献しました。

IC/MRA の基本理念は、正直、純潔、無私、愛という絶対道義標準で自らの生き方を見直し、「誰が正しいかではなく、何が正しいか」という姿勢で家庭や職場の問題を解決しようとするものです。

戦後すぐに活動を開始した日本 MRA は、1975 年に日本支部 (任意団体) として発足、後に社団法人の認可を受けた後、2012 年から公益社団法人国際 IC 日本協会として活動しています。

公益社団法人国際 IC 日本協会は、個人や企業のご支援により活動しています。

テーマ：輝かしい共生社会のために～今、私にできること～

For a society that works for all and works together : what I can do now

プログラム

11月9日(土)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

9:00		受付開始
9:30 - 9:35	開会式 開会の辞	矢野弘典氏 (国際 IC 日本協会会長)
9:35 - 10:00		静かな時間 チョン・ヨンヌク氏 (韓国)
10:00 - 11:30		基調講演 ラビンドラ・ラオ夫妻 (インド)
11:30 - 13:00		昼食 参加者交流
13:00 - 14:00	アクティビティ	足立憲昭氏 (国際 IC 日本協会副会長)
14:10 - 14:30		記念写真撮影
14:30 - 16:30		ファミリーグループ・ミーティング
16:30 - 17:00		初日振り返り
17:00 - 17:15		アンケート記入 (初日のみ参加者)

11月10日(日)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

9:00		受付開始
9:30 - 9:35	挨拶	橋本徹氏 (国際 IC 日本協会名誉会長)
9:35 - 10:15		静かな時間
10:15 - 11:00		講演 バーバラ・ローラー女史 (豪)
11:00 - 11:20		講演 車光善博士 (韓国 MRA/IC 総裁)
11:20 - 11:50	報告	東北アジア青少年フォーラム参加者 須崎純史氏、石ヶ森 祐氏、成豪哲氏 (国際 IC 日本協会理事)
11:50 - 13:00		昼食 参加者交流
13:00 - 13:30	講演	佐谷隆一氏 (国際 IC 日本協会監事)
13:30 - 14:00		講演 綱川章氏・幸子氏 ご夫妻
14:00 - 15:15		ワークショップ「JAPAN I CARE」 ラビンドラ・ラオ夫妻 (インド)、山本愛さん
15:15 - 15:30		チョン・ヨンヌク氏 (韓国)
15:30 - 16:30		お茶
16:30 - 16:50		フォーラム全体 振り返り
17:00		閉会
17:00 - 17:15		アンケート記入

バーバラ・ローラー

Ms. Barbara Lawler (豪)

[インターナショナル IC 長老委員会議長]

オーストラリアのブリスベン生まれ。21 才で IC と出逢う。

大家族の中で彼女自身のチェンジ（変革）により新しい建設的な人生の方向を見出した。1970 から 1985 年まで欧州、インド、オーストラリアで IC の専従として働く。その後 20 年以上にわたり、オーストラリアのシドニーで同国の二つの大手メディア会社で人事及び労使関係の仕事に従事（2011 年に引退）した経験を活かし、ビジネス修士号（雇用関係）を修得。2017 年 メルボルンからブリスベンに転居した。

2003 年以來、青年達と共に IC 活動に尽力したが、特にインドネシア、東ティモールへの訪問において触発された。そしてオーストラリアと隣国との間に信頼の架け橋を築くことに情熱を注いでいる。

彼女はインドネシアが民主主義のための取り組みを通じて、また世界に信頼の架け橋を構築するその強固で真のイスラムのリーダーシップを通じて、世界に多くのことを与えると感じている。

2010 年から 2014 年まで、IC オーストラリアの連絡調整メンバーを務め、IC オーストラリアの新しい方向性に導くことに貢献した。現在、IC オーストラリアが組織の変動期にある中、IC 各種の活動の連絡調整役を務める。オーストラリアの Creators of Peace National Advisory Group のクイーズランド代表者。

IC は、世界が必要としている価値観を高めるため、個人の在り方とグローバルな世界との関係におけるダイナミックでユニークなアプローチを提供するが、その IC 自体が必要とする継続的な変革と成長を支援することに情熱を注いでいる。

車 光善 博士

Dr. Kwang-Sun Cha (韓国)

[韓国 MRA/IC 総裁]

MRA/IC 総裁

ソウル明和大学校大学院 卒業（文学博士）

明和中・高等学校 英語教師

世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部 理事・監査・事務局長・総裁（現）

韓国国体競技会 企画部長・事務局長・副会長・会長

国務総理室・文化観光部・青少年体育部・女性家族部・ソウル特別市青少年政策諮問委員

アジア青少年連合会（AYC）首席 副会長 韓国青少年国際センター所長 湖西大学校教授

受賞歴：大統領 表彰（大統領）

国民勲章（韓国政府）

アジア青少年賞（アジア青少年委員会）

国際青少年賞（世界青少年総会）

チョン・ヨンヌク

Mr. Yeonyuk Jeong (韓国)

[IC 世界連絡調整評議委員会]

2018年にICの世界連絡調整評議委員会メンバーに選出された。

YYの愛称で知られるヨンヌク氏は土木技師としての教育を受け、20年以上にわたりICの専従として働いてきた。IC オーストラリアに在籍していた時の2001年からの10年間に亘り5つのAction for Lifeプログラム全てのサポート役を担ってきた。

現在IC Koreaの理事を務め、APCG（アジア、太平洋地域連絡調整）設立にも携わった。

「インターナショナルICのリーダーシップを担うことにチャレンジを実感している。自分一人では世界連絡調整評議委員会の課題に取り組む能力に自信はないが、ガイダンスに従う準備はできている。ガイダンスに従う道が唯一、希望を持って前進できる道であることを確信している。インターナショナルIC世界連絡調整評議員として、他の評議委員とともに、ガイダンスに叡智を求め働く心構えです。」

シャオユン リュウ

Ms. Hsiao Yun Liu (台湾)

MRA/IofCの専従者の両親の下に生まれたことから、自分の生き方をIofCの思想と精神に則って生きようと勤めてきた。2003年に大学を1年休学し、AFL（Action For Life: インドを中心とした7ヶ月に亘るMRA/IofCの研修プログラム）のリーダーシップ研修に参加。AFLの研修は自分の人生の岐路となった。AFL研修以来、静かな時間を実習し、自分の心の安定について、責任を取るようになった。AFLのプログラムでは、広く世界に視点を広げることは言うまでもなく、自分に自信を持つことを学んだ。2006年大学卒業後、1年間ダンスの教師をし、2008年から台南/台湾のEQ（Emotional Quotient）協会に勤務、主に十代の青年たちの成長と共に歩むことで、彼らの成長のために、様々なワークショップを用いて研修指導している。

第41回 IC 国際フォーラム全体概要

国際 IC 日本協会 副会長兼専務理事 足立 憲昭



当協会を代表する事業として11月9～10日に、「第41回 IC 国際フォーラム」が川崎市国際交流センターで開催されましたので、その内容をご紹介します。

- ・今回のテーマは、「輝かしい共生社会のために ～今、私にできること～」(For a society that works for all and works together: what I can do now) が選ばれました。その理由は、多くの国々で保護主義や内向き志向が顕著となってきた今こそ、民族や宗教、国や文化の違い等による価値観の異なる人々が共に手を携え共生する社会を実現しようとの思いです。
- ・フォーラム初日は、国際 IC 日本協会の矢野 弘典会長が「開会の辞」を行ったあと、海外ゲストによる基調講演や「IC の考え方」に沿った講演が続きました。さらに、アクティビティやグループ・ミーティングによって、友好の絆が高まりました。そして、夜は宿泊者による食事会(センター食堂)が行われ、海外ゲストとの楽しい懇談が行われました。
- ・フォーラム2日目は、橋本 徹名誉会長の挨拶に始まって、海外ゲスト、国内ゲストの講演が続きました。その中でも、昨年度に続いて参加された綱川ご夫妻の海外での活動に至る、厳しい逆境を乗り越えられた経緯の話は、全員が心を打たれました。また、「第16回東北アジアフォーラム」の報告では、成 豪哲理事の進行により、韓国 MRA の車 光善総裁の話に続き、引率者須崎 純史氏、参加者石ヶ森 祐氏の二人が当協会への感謝を述べ、改めて「次代を担う若きリーダーたち」への支援の重要性を感じました。さらに、インドのラオ夫妻と日本の若者が行った歌や寸劇での訴えは、参加した人々に、IC の原点である「静かな時間」や「4つの標準」の大切さを再認識させた場面でした。

ここからは、第41回国際フォーラムの振り返りと次回フォーラムへ向けた方向性を述べます。

・今回フォーラムの振り返り

- ①会場を公共施設にしたため参加料金を安くできたので、多くの人々に参加を呼び掛けられる。今回は、案内が遅れたが次回からは、会員を通じた紹介を強化する。
- ②会場が国際交流センターであったため、日本で多くの外国人が働かれており、その人たちに様々な支援サービスが行われていることを知る機会となった。
- ③ここ数年は、公益社団法人として開催する「国際フォーラム」でありながら、「会員と海外ゲストが出会う集まり」になっていた。今回は、参加者目線のプログラムへの変換点となっており、会員以外の方々へのいくつかの試みが行われた。
- ④「IC 協会への想いや考え方」については、世代間だけでなく、個人の関わり方においても差があり、その多様性がますます大きくなってきたことが顕在化した良い機会であった。
- ⑤ IC 的考え方(道徳的な面)を持っておられる方で、国際交流活動に取り組む、日本国籍の方(海外経験を語れる方)、外国籍の方(日本に深い関わりのある方)などをゲストで招聘する。
- ⑥参加者全員が、協力して行うアクティビティ(ゲーム等)やワークショップ(全員が考えを述べ、グループで纏めて発表する)が重要であり、そのためにファシリテーターを養成する。

・次回に向けた方向性

- ①海外ゲストや国際交流に携わる日本人等の講演者から「IC 精神」につながる体験事例を聴く。
- ②グループに分かれて、参加者一人一人が「身近な国際問題への関心事」を述べ、グループ毎に話し合っていて纏める。全体会議でグループごとに話し合った内容を参加者全員がシェアする。
- ③参加者が積極的に異文化コミュニケーションを体験できる「参加型プログラムへの改編」に重点を置く。

以上



ジャヤシュリー・ラオ夫人

Mrs. Jayashree Rao

(インド)

はじめに

美しく、大変効率の良い動きのある日本社会にお招き下さり、ありがとうございます。

日本の皆さまから多く学ぶことがございます。このフォーラムでお話しする機会を与えられましたこと、光栄に思います。過去10年間、ICアジアセンターパンチガニの活動の一つとして、「グランパリ」という農村環境改善センターの運営を担ってきました。

インドICの新しい試みで、個々人の心のチェンジによって地域開発・発展のために寄与することが可能であることを実証するものです。心の奥の聲に耳を傾け、4つの絶対道徳標準に沿って、自分の有りようをはかる道具とし、導かれた効果には目を見張るものがあります。

グランパリの活動

ここでいくつかのスライドをご紹介しながら進めて行きたいと思います。私たちの働きの要点としては清潔な飲料水を村人に供給すること、農家の人たちが伝統的な自然農業方法を行い、科学的価値の付加を最低限に抑えようとする農業への働きです。清潔な飲料水の確保のためには、村人たちが、清潔な水を飲むように、湧き出る泉の上部にボックスを建てます。また、夏期の間には水の供給量を増やすために貯水小屋も建てます。また、排水溝に上質のセ

メントで蓋をし、健康を損なうゴミの溜まり場にならないようにします。排水溝から出た灰色の水は野菜や植物の根を使った安価な濾過装置で更に濾過され、それによって乾季中に水を農業などにリサイクルできます。私たちはまた、廃棄物処理システムもありますが、課題はいかにして安価な解決策にたどり着くか、それを模索しています。ゴミ処分問題と共にプラスチック処理問題も生じています。この画面のように、石鹼を使って手洗いをすることの大切さを学校で教え、多くの子供達の健康を害することから守ることに成功しています。ティッピータップ（不安定な蛇口の意）と呼ばれる手作りの手洗い場を作りました。これを150の村の学校に紹介し、児童たちの病気発生による欠席率を激減させることが出来ました。

女性や若者の声

女性や若者の声に耳を傾けようとするICの取り組みにより、女性や若い人も村の問題への発言権を持つようになり、必要とされていた村開発への関心も高まってきました。日本とは異なり、インドの村は男性支配の社会です。妻のことを権利のない所有物と考えています。国の政府は各農村地域でも村議会の5割は女性の議員が選出されるための議席を保証はしています。しかし法律制定だけでは人々の長年の考えを変えることはできません。私たちグランパリでは女性たちの中で、自分たちのためのネットワークを作り、グループとして問題提起を発信するように働きかけています。同時に、選出された人には、選出された役割、具体的な責任について研修や指導を提供しています。そうすることで家庭内の男性たちに全面依存することはないのです。

グランパリのスタッフたち

グランパリのスタッフたちは主に村人たちですが、その考え方が広く村全体に広がりつつあります。

バグワン・マンダーレの家族のストーリー：彼の妻が再利用可能な布製のサニタリーナプキンの作り方の研修に参加しました。この研修の中で指導をしていたグランパリの女性が、クラスで静かな時間を研修生たちと持つようになりました。その中で、参加者の一人であったプナムが結婚して以来、だれか同伴者と一緒でない限り家の外に出ることを許されていないことを話しました。彼女はこのような人生にだんだん嫌気が差し、夫に怒りを覚えるようになりました。しかし、彼女の心に変化が生じ、夫に抱いていた怒りについて謝罪をしました。そのことで夫の考えも変わり、彼女の単独での外出が許されたのです。後に、結婚してから初めて、彼女一人で30kmも離れた町に出かけて自分自身のものを買った喜びを興奮気味に話してくれました。グランパリでは毎週水曜日に静かな時を持ち、多くの村人たちも出席します。ある水曜日、彼女の夫も一緒に来た時に、彼は政治的に弱い立場にいて反論することのできない性格の叔父の所有地を独占していましたが、それを叔父に返すべきだと考えるようになりました。毎週、この考えが彼の頭によぎった後、彼は家を引っ越して、叔父にその土地を返却したのです。静かな時がもたらすマジックによって、私たちは多くの洞察を得て、必要なことは正すよう促され、その過程を経てこそ、自分で思い描けることより大きな課題に取り組むための英知と力、その可能性に導かれます。心の声が私を鼓舞し、村びとのために何か行動を起こそうという考えが与えられたのは60才の時でした。これがICの農村開発センターの設立にまで至ったのです。物理的な必要性に対処している間に、同時に人としてなぜ幸せでないか、不満に囚われているのかを考えるようになり、自分自身の持って生まれた性格と向き合うようになったのです。

私と娘の関係

私の娘が学校の生徒だったの時のことをお話ししたいと思います。彼女は一度、両親に褒められようとして成績表を不正に修正したことがありました。自



分たちの娘がそんなことをするなんて、夫と私はとてもショックでした。彼女の不正を責め、教師のところに連れ出し自分のしたことを認めさせました。

後になっても、彼女が正直な人になるようにと願いながら、彼女の間違った考えを責め続けました。娘を愛しておりましたから、彼女のためを思ってしていたつもりでしたが、ある日、それが彼女にどれ程辛い思いをさせていたかという自分の間違いに気付きました。そこで夫と二人で私たちの無慈悲に対して、謙虚に娘の許しを請うべきだと決意しました。これは難しく痛みを伴うことでしたが最後には娘とともに皆で涙しました。その涙は癒しへの涙でした！それがあってこそ、より強く、深い家族関係がむすばれました。娘はこの一件で受けた仕打ちから親に対しての信頼が揺るぎ、自分がいかに良くない人間であることを思い知らされていたと話しました。私たちの謝罪が彼女の緊張を解きほぐし、喜びと誇りをもたらし、彼女自身の人生のキャリアを築き上げる道に成功し、心から楽しんでいます。親である私たちは自分たちの愚かさにもっと早い時点で気づく勇気と正直さがあつたらどんなにか良かったらうかと思っています。

貧困からの脱皮

貧困は災いの元で、世界のどこであろうと無くすべきものです。精神の貧困もまたそれ以上の災いの元となり、それ故私たちは、静かな時間を持ち、自分の中で、家族の中で、社会の中でどう対処すべきか考えます。それは当然、私たちの想像をはるかに超えた方法でより大きな社会へと導いてくれるでしょう。



ラビンドラ・ラオ 博士

Dr. Ravindra Rao

(インド)

IC インド理事

MRA との係わり

IC、前は MRA といっていました。この IC の考えに自分の人生を捧げる決意をして行動を始めてから今日まで 54 年になります。私は最初に「ごく普通の自分のような人間に、国を変え、世界を変えるための素晴らしい役割がある。」という考えかたに夢中になりました。今日でも世界には多くのことについて変わらなければならないことがあります。この視点が自分の想像を掻き立て、そのために何でもしたい！そのためならほかのことはなんでも諦める、そのためならどんなことでもする！と、生きる目的と意義を書き記し、自分はこのために生きようと決意したのです。このフォーラムのテーマ「輝かしい共生社会のためにーいま、私にできることー」、実に素晴らしい。今日の社会は小さくありません。自分が世界に影響を及ぼすことができると言われても、たった一人でどんな影響を与えることができるのでしょうか。世界に貢献するビジョンとは？自分が社会に影響を与え、その社会が国に、国が世界にまで影響を及ぼすのに、何ができるのかを理解するのは難しいことですね。しかし、世界の気候変動により予期できない津波がいろいろなところで起きていることから、皆さんの方が世界の中の誰よりもよくご存知のはずです。

パンチガニの生活

10 年間在住してきたパンチガニは、妻は 50 年以上の間、関わってきたセンターですが、毎年降雨量の平均が 60 インチだったのが最近 60 インチまで行かないのです。しかし、今年は乾季に入る 9 月になっても雨が止まず、今月私たちが日本に来る二日前の 11 月 5 日でさえ雨が降っていました。平均の降雨量が 60 インチ満たないところに 10 月までに 90 インチの雨量があったのです。これは明らかに世界のどこかで誰かが何かを起こしており、このことが私たちみんなに影響を与えているのです。これが地球温暖化の一例であり、ほかにも問題がありますがそれはここでは述べません。しかし今こそ、私たちは心の奥の声に耳を傾ける時だと思います。

私たち一人ひとりの生き方が世界の現状に繋がっているのですから。私たちを動かしているものが、世界を動かしていることにつながっているのです。

インドで、一つだけ謙虚なところがあります。それはこんな弱い自分でも少しだけなら社会のためにできることがあると言います。でもそれでは十分では無いのです、少しではなく、自分のできることのベストを尽くすこと、少しの時間を割くのではなく、一度の週末だけではなく、自分の人生をかけて世界が必要としていることのためにどう生きるかについて、私たちは導かれなければなりません。誰でも、みんながどんな小さなことでも自分のできることをすることができるのです。

質疑応答

質問：54 年間に、IC も社会のニーズに応じて変わらなければならないことがありましたか？

回答：1964 年に始めた頃、自分が変わり、世界が変わるという簡単な哲学のもとで、これは是非ともやらなければならないという精神で始めました。しかし、すぐにそんなに簡単にすることが可能ではないことに気づきました。世界でいわれているアイデアや先人の人生についての教えなどから、我々のなかのある人たちは、自分たちはやり方を間違っているのではないかといたりしましたが、それで

も IC の考えを試してきた何人かの私たちは、活動を続けている過程で多くのことを学びました。インドでは人々はよく理解しているのですが、一人の神のことを多くの名前をつけて神と読んでいるのですが、私にとってはこの「より偉大な力」という概念をなかなか理解できませんでした。

2,3年試みた後に、ここで詳細については述べませんが、私たちは神が私たちに語りかけることだけに従い行動をとることを決意しました。これは難しい生き方です。そして、また2,3年後には何人かの人たちが去りました。正直に言えることは、私たちがMRAに出逢ったのは20才から25才という若い時でした。多くの若い私たちは、ここではシニアたちがコントロールしていると感じていました、これは私たち自身の献身のあり方に重大な問題でした。MRAを信じていた私たちは、MRAの働きは確かに生きている、と確信していましたが、一緒に働いている人たちについては、如何なものか…とそこで活動から去りました。もちろん、MRAを去ったと言っても、それぞれの与えられたところで、それぞれの心の声を聴き、自分たちができることを行うという生き方は続けていました。もちろん間違いを起こすのが人間です。シニアの人達たちも正直に自分を見つめ直し、同じ過程を歩んでいたのです。確かに効果があります。それでも大変難しい時期もあり、一時はパンチガニの一部を閉鎖するべきではないかとその可能性まで考えました。そして皆でともに祈りました。もちろん祈りだけでは不十分で、これからのことを考えて計画しなければならないのですから、一緒にこれまでの道のりでどこで間違いを犯したのか、見つめ直しました。そして諦めませんでした。その間においてもセンターではダイアログをはじめとする各種の会議の企画は運営されていました。その過程があったからこそ私たちが理解できたのです。自分自身が確信を持ち、人生をこれに捧げるといふ人は多くいませんでしたが、何人かの人たちが、パンチガニに来てプログラムを運営していくことが、ゆっくりと始まりました。すぐには軌道に乗れませんでした、徐々にその歩みが成長して行きました。

やがて、突然に何かが起きたのです。大いなる心



に託してきたお陰ではないかと思うのですが、政府官庁で重要な役職を担っていたある一人の方が退職してパンチガニに来たことがありました。ちょうどその時はユースキャンプが開催されている時でした。彼はそれを見て「これこそインド政府が必要としていることだ!!」と言ったのです。彼個人としては、私が始めたようにまず自分の在り方からチェンジしたわけではないのですが、自分が正直でなかったことには触れました。ですが、ここで重要なことは、パンチガニで見聞きしたことが彼にこここそ、解決策があると思わせる何かがあったことです。彼が携わってきた政府官庁のネットワークによって、公務員がパンチガニのプログラムに参加するようになり、ある時期には政府官庁から疑問視されたことさえありました。

今日においては、パンチガニで研修を受けた数多くの政府管理職公務員が、インド各地にいるのです。

ある州では、その地域官庁との賛同のもと、その土地の公務員をそこでトレーニングを実施することも有ります。地方に常住するICのチームメンバーもいます。多くの官庁公務員がパンチガニで講習を受け、若い世代の参加者も増え、今ではパンチガニで4日間のコースのための研修を受ける青年たちの参加者が年間で1000人以上になり、大きな効果をあげております。

私たちが学んできたことの1つに、もちろんチェンジをした人たちのフォローアップはしなければなりません、チェンジしようとする姿勢を持っている人々のフォローが大切であるということです。最後に村人たちとの働きについてですが、全てについて理解をしている必要はないということです。重要なことは、人々に自分で心の声を聴くという機会を提供すること、そして静かな時間を持つこと、それ

が多くの問題を解決したのです。第2に気がついたことは、私は10年間理事長を務めてきました。しかし、一年ほど前に、この役職を辞する時だと明確に思いました。それまでは、経験乏しく正しく仕事ができな人があるかもしれないとも思いましたが、いや、そうではない、次の人に信頼を持って託すべきだ、新しい人のやり方で展開していくことが

間違っているとは必ずしも言えないではないかと思いました。そして若い人を後任としてみつけ、彼がセンターで仕事をしております。私はまだ理事ですが、徐々に会計面と法律面だけを確認していく役割とし、全体のリーダーシップは新任の方がやっております。



バーバラ・ローラー

Ms. Barbara Lawler

(オーストラリア)

インターナショナルIC

長老委員会議長

はじめに

今回、この講演にお招きいただき大変光栄に思うと同時に深く感謝いたしております。

私の両親は1980年代に国際フォーラムに参加致しました。19歳で私の父は、第二次世界大戦の最中ドイツ人と中東で戦っておりました。叔父たちの内3名は太平洋戦争に参りましたが、全員無事帰還したとお伝えできるのは大変うれしいことです。又、第二次世界大戦以降、日本とオーストラリア2国間で沢山の許しと和解の物語があったことも嬉しいことです。心の内なる声を聴き、内なる変化を通し2国間の国際関係がともすれば悪化したかもしれないものが、変容と協力という一つに変化することが出

来たのです。私にはオーストラリア人と日本人の間に生まれた兄弟の孫娘と、息子がいることも付け加えておきます。私の車は三菱ですし携帯はサムスンです。私の家族は、アイルランド、英国、ドイツ、ノルウエィ、そして今のスリランカ、インドネシア、日本というように様々な国から来ています。これは典型的なオーストラリアの家族と言えます。

私とMRAの出会い

50年近く前にICまたはMRAに出会った時、私にとってそれは意義のあることでした。絶対道義基準は生きるための重要なガイドです。これらの基準の課題を受け入れると決めたとき、長い葛藤の末、私は大きな自由と喜びを経験しました。私は目的を模索する、少し野蛮な西洋の自殺願望のあるティーンエイジャーの一人でした。私が最後に自殺願望にかられたのは1971年の事でした。その時「私の命は神が使うためであり、自分から奪うものではない」という決意をいたしました。それは私の人生でゆるぎのないものとなりました。絶対道徳基準は、すべての自由を望む多くの反抗的な世代とは反対の影響を与えました。それらは私に選択の明快さを与え、静かな時間と共に方向の明快さを指し示しました。

私は上司にうそをついたことを含め、関係を正しました。私は他の人、殊に両親を非難することを辞めました。静かな時間は私に前進の道、優先順位、取るべき行動、正しい関係の構築、世話をする人々、状況や他者のためのビジョン等を与えてくれます。

私は、少なくとも自国の誰もが、この真の自由と真の喜びを体験することを願っています。

オーストラリアの先住民

先住民と非先住民のオーストラリア人の関係は、オーストラリアの運命にとって非常に重要であり、そこに住むすべての人達の癒しにとっても欠かすことのできないものだと考えました。我々の先住民の長老の一人が言ったように「これは贈り物という意味がある」と。静かな時間は個人的なものであれ、オーストラリアの白人の到来による痛みであれ、私の人生の痛みに立ち向かう勇気を与えてくれます。

我々が先住民の祖先をもつと認める人々以上に多数の白人が存在します。私達はIC オーストラリアで先住民の友人とこの癒しの必要性を語るためグループを結成し、白人オーストラリア人がこの地域にもたらした破壊的な人種差別と植民地主義から解放されました。オーストラリアの先住民文化は世界最古の生活文化と言えます。先住民は別として、オーストラリアは1788年以來、囚人、ゴールドラッシュ、アフガニスタンのラクダ乗りといったポートピアールの国でした。第二次世界大戦後、難民の波が次々とやってきました。ギリシャ人、イタリア人、インド系中国人、アフリカ人、シリア人、イラクなど。すべての大陸から300以上の民族と言葉が流れ込みました。私達は別々のコミュニティーではなく、お互いにアイデンティティーと運命を手繰り寄せようとしています。私達には、世界に真の平和と癒しを示す国と地域を構築する機会が与えられています。



新しい出会い（イスラム教徒）

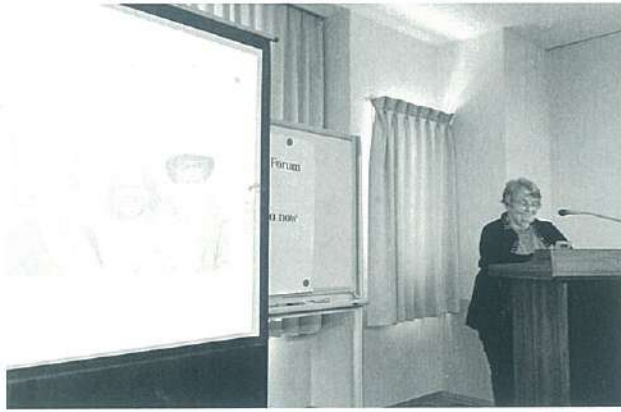
私がイスラム教徒とつながるようになったのは、9・11の後、内的導きの感覚を得たためです。9月12日にシドニーの美しい場所を歩いている時、イスラム教徒の家族が私に向かって歩いてきました。

その時怒りがこみ上げてきました。自分自身の心を確認しました。翌日、私は近所のイスラム教徒と知り合うべきだと考えました。私は郊外のイスラムセンターに行き、そこで食事に招待されました。その後、多くの異教徒間の経験が続きました。それから世界最大のイスラム教徒の国であるインドネシア、すなわち最も近い地域の隣人を訪れる機会を得ました。それには最も多くの挑戦と、非常に多くの知恵とインスピレーションを要しました。これらの関係と友情を築くことは私にとって贈り物でした。

もっと多くのオーストラリア人が経験する必要があると思います。

オーストラリアのMRA

IC オーストラリアはメルボルンに拠点がありますが、1956年にアーマーと呼ばれる美しい家をセンターとして提供していただきました。そこには多くの日本人も訪れました。あなた方の多くも訪れた事と思います。1970年代半ばにMRA日本から日本の若者にトレーニングを提供するよう要請があり、他の多くの国からも依頼が拡大したため、センターを広くしました。IC内で日本及びすべてのアジア太平洋諸国との間で、より多くの国を超えて交流が出来ることを願っております。IC オーストラリアはここ数年グループの文化的、構造的変化のプロセスを進めてまいりました。これにはIC オーストラリアをより効果的に、関連的にそして持続可能にするという目標があったからです。私達はチーム内の長きにわたる葛藤に対処してきましたが、それでも時折必要となり、次第に運営方法を改善してきました。今リーダーシップを取り責任感のある小さくても力強い若者のグループが存在します。常に課題はありますが、新しい役割と世代への移行に取り組むこと



が出来ました。これらの変化は、私たちが意図する変革の仲介役として大きな自信と情熱を与えてくれました。

スピリチュアルエコロジー

オーストラリアは長年にわたって干ばつを経験し、IC オーストラリアは主に Kirsty Argento の指揮の下で、環境管理に関連する創造的なプログラムを模索しています。スピリチュアルエコロジーは現在の生態系学的危機に対する信念に基づく対応です。

これは生態学と環境保護を神聖な意識と結びつける研究と行動の発展分野です。精神的な認識と実践を含む環境問題への対応を求めています。スピリチュアルエコロジーが取り組む基本的な問題は、地球に対する私たちの根底にある態度と信念です。

James Gustave Speth、米国政府の複数の行政機関の上級顧問、および世界資源研究所の創設者により要約された問題です。スペース氏曰く「私はかつて最大の環境問題は生物多様性の損失、生態系の崩壊、気候変動だと考えていました。30年間の科学の発展がこれらの問題に対処できると考えていました。

でもそれは間違いでした。最大の環境問題は利己心、貪欲、無関心です。これらに対処するには、文化的小および精神的な変革が必要です。」スピリチュ

アルエコロジーは、唯物論や貪欲ではなく、自然への敬意、相互関係、責任感、思いやり、奉仕の精神に根差した未来を創造する必要性を認識する若者を支援し鼓舞します。

今後の目標

コー、アジアプラトー、および私たちの地域をサポートできるように、一度に12名の長老達をメンバーにすることを目標にしています。その他、新しい権限で強調された早い時期での紛争解決と関係性の構築です。又オーストラリアでの経験から、出来るだけ早く紛争を認識し、対処する必要があることを付け加えたいと思います。対立は良い目的になりえます。それは誠実に率直に対処することで、私たちが見たいと望む世界の変革を起こすよう、私達チームの精神と仕事がより深く、より強く成長する機会となるからです。これにより、継続的に取り組む必要のある移行や世代交代を妨げるものから解放されるのです。チーム内で和解が起きたとき、若者が責任を取りリーダーシップを取るといふ新しい生活がそこにはあったのです。ICの文化は、移行、特に世代交代が何を意味するのか、より深く理解する必要があります。移行は高齢者に役割が無いということではありません。異なる役割を意味します。

自分自身に問いかける必要があります。「自分のあり方、操作方法、視点やアプローチにどのような違いがあるのか」と。共に寄り添い教育をすることは私たちの責任の中心であり、これを確実に実現するため、すべての皆さんと協力したいと思います。

もちろんすべてを自分たちでするわけではありません。しかし、この大事なフォローアップの作業が発生する時に、真摯に国際的にあなた方のすべての人が共に働くことが、今望まれているのです。



綱川 章、幸子 ご夫妻

鍼灸師、元教師、元 JICA シニアボランティア

オーストラリアの旅

2002年8月1日私たちはオーストラリアのへそと言われているエアーズロックのふもと、ウルル・ナショナル・パークに来ていました。広大な国立自然公園の周辺は、はるか地平線まで続き視界を遮るものは何もなく、私たちのほかに誰も見当たりません。予定時刻になってもバスはなかなか来そうにもありませんでした。

強い日差しとオレンジ色の大地、太陽の光線で岩肌の色が微妙に変化するエアーズロックを眺め、最高でした。そこへ1台の車がゆっくりとしたスピードでやってきて、私たちの近くに止まりました。中から二人の女性が降りてきて、ゆっくり進んで、私たちの隣のベンチに腰を下ろしました。お互いにあいさつを交わし、エアーズロックの素晴らしさを褒めたたえました。二人は親子で、母親のマージョリーさんと娘さんのメリッサさんでした。ビクトリア州からドライブ旅行をしているとのこと。エアーズロックを訪れる旅はマージョリーさんの長年の夢で、それが実現できとても幸せだと話してくれました。

マージョリーさんとの出会い

マージョリーさんは、野鳥に友達のように話しかけ、パンくずをあげては楽しそうに笑っていましたが、足が痛いようで、時々辛そうな表情をしていま

した。妻からそのことをそっと聞いて、私はベンチに座ったままのマージョリーさんのそばに行き、膝に触れ、按摩をしてあげました。マージョリーさんは目を丸くして、「ドクター、あなたは魔法の手を持っているのでしょうか。私の膝の痛みが和らいで、足がとても軽くなった気分です」と言って、私たちにホテルまで車で送ると申し出てくれました。私たちはバスがもうすぐ来るから、もう少し待ってみますと申し出を辞退しました。私たちのバスは予定の時間より2時間半も遅れていることに気づき、ひょっとして、バスの停留所を間違えたのではと不安な気持ちになっていたとき、マージョリーさんたちが戻ってきて、「さあ、車に乗って」と声をかけてくれたのです。別れた後も私たちのことが気になり、引き返してくれたのでした。あのまま、人気のない場所に取り残されて夜になったらとんでもないことが起きたかもしれません。マージョリーさんのご親切に何と感謝したらよいか、本当に助かりました。

私たちのこと（ホテルの話し合い）

私は、マッサージしてあげましようとして申し出て、ホテルの部屋で時間をかけてマージョリーさんに按摩をしました。治療が終わると「日本のマッサージはなんて気持ちがいいのでしょうか。それに、繊細な手の動きに感動しましたよ。おかげで体がとても良くなり、ダンスが踊れそう」とみんなを笑わせてくれました。お茶を一緒に飲みながら、なぜオーストラリアへ来たのかを話しました。私は30歳のとき（結婚2年後）、ベーチェット病で失明し、それまでエンジニアとして働いていた会社を辞め、鍼灸



マッサージの道を歩むことを決心しました。点字を覚え、白い杖を使っての歩行訓練と、東京文京区の盲学校で3年間、東洋医学と実技に打ち込み、鍼灸・マッサージ師の免許（国家試験）を取得できました。その後、全国の盲学校で東洋医学や鍼灸マッサージを教える教師の道へと進み、横浜市立盲学校に就職しました。10年前、オーストラリアの小学校で生徒に日本語や日本文化を教えるボランティアの応募試験の合格通知をもらいましたが、現実はやはり無理だとあきらめかけていました。その時、夫は「きっと何とか一人でも生活できるから、心配することない。大丈夫だよ。いいチャンスかもしれない。思い切って行って見たほうがいい」と、背中を押してくれました。私の夢は実現し、半年間オーストラリアで素晴らしい貴重な体験が得られ、今回はホストファミリーや小学校の先生たちに再会したことを話しました。話が終わるとマージョリーさんは「大変な困難をご夫婦で乗り越えられたのですね。素晴らしいことだわ」とほめてくれました。

マージョリーさんの家族

今度はマージョリーさん自身のことを語り始めました。私の夫はシンガポールで、敵国の日本軍の捕虜となって殺されました。私の兄も日本軍によって殺されましたが、それは終戦後2日目に起きたことでした。愛する肉親を二人も失った悲しみは深く、何年時が過ぎても癒されることはなく、日本人を許す気持ちには中々なれませんでした。こうしてあなたたちに会い、初対面なのに私の足を親身に治療してくれ、暖かい言葉をかけてもらい、私の日本人へのわだかまりが今日消えました。何か不思議な巡り合わせを感じますと話してくれました。

エアーズロックのふもとで偶然出会った人は、戦争で夫と兄を日本兵によって殺され、若くして戦争未亡人となって、幼い子供を抱え、どれほど苦労したことでしょうか。マージョリーさんの人生を思うと心が痛みました。日本人としてたいへん申し訳ないばかりで、どんな言葉で謝罪したらよいか、出てきませんでした。でも、私たちを通して、長年の

日本人へのわだかまりが消えたと言ってくれたことは良かったと思いました。

オーストラリアの学校での経験

1992年私はオーストラリアのバリナという港町のサザンクロス小学校で日本語を教えました。バリナはゴールドコーストから車で2時間ほどの距離で、シドニー方向へ南下する位置にあります。生徒数500名、教師20名のサザンクロス小学校に、初めて日本人の日本語教師が来たことで、地元では話題となり、大変歓迎されました。生徒も教師も全員に日本語を教えてほしい要望があり、近隣の学校からの招待もあり、様々なイベントも参加し、まるでスターになったような忙しい半年間でした。3年生クラスの担当でしたレズリー・バーフォードさんのご自宅にホームステイさせて頂き、4人家族の中に加えてもらい、帰国するまでの半年間たいへんお世話になりました。オーストラリア人は性格がとても穏やかで、気さくです。友好的で、ユーモアセンスが抜群で、広い心を持っています。私は滞在中に偏見や人種差別を感じることは一度もありませんでした。本当に楽しく、有意義で、充実した日々の思い出は私の一生の宝物です。特に6年生と一緒に7日間のメルボルンへの修学旅行へ行った思い出は印象深かったです。国会議事堂、科学博物館、オリンピック選手を育成する施設、水族館などいろいろ見学しましたが、最後にシドニーへ立ち寄り、カウラという町にある日本庭園へ行きました。

日本人の捕虜収容所

そこは第2次世界大戦中、日本人の捕虜収容所があった場所です。1100名以上の日本兵捕虜が収容されていました。1944年8月5日、日本兵の集団脱走事件が起き、射殺あるいは自決で277名が亡くなったそうです。後にオーストラリアの人々は亡くなられた日本兵一人一人の墓に桜の苗木を植えてくれました。日本人は桜が大好きで、日本のふるさと

を思い出せるでしょうと冥福を祈ったそうです。収容所跡には日本庭園が造られ、きれいに保持されていました。オーストラリアに来て、そのような事件があったことを初めて知りました。

戦争でお互いに戦わなければならなかった日本とオーストラリア。戦争が終わった後、オーストラリアでは日本語や日本文化を積極的に学び、理解し、友好を築く運動が起きました。1990年ごろから積極的に公立の小中学校で日本語を学ぶ授業が行われるようになりました。また、戦争の悲惨さを伝え、世界平和の大切さを教えていました。オーストラリアは未来を担う子供たちに異なる文化や言葉を学び、世界の人と交流できる機会を積極的に取り入れ、

平和を尊ぶ人となるよう取り組み、日本と比べて進んでいると驚きました。文化も言葉も違うから思い違いや偏見を持ってしまいがちです。外国の言葉や文化に興味を持ち、学び、敬意をもって交流を続け、友好を深めることがとても大切だと思います。最後に話をもう一度マージョリーさんに戻します。マージョリーさんに会った当時、彼女は83歳でした。もし、今も生きていたら105歳です。

残念ながらもうお会いすることはありませんが、今日この場でマージョリーさんと私たちとの出会いを皆さんにお伝え出来たことを知ったら、ものすごく喜んでくれるでしょう。ご清聴ありがとうございました。



車 光善 博士

Dr.Kwang-Sun Cha

東北アジアと世界の平和実現のための

希望のメッセンジャー

青少年世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部 総裁

まず、世界道徳再武装（MRA/IC）韓国本部を代表して第126代徳仁天皇陛下の即位と、30年間の平成の時代を後にして「美しい調和」の令和の時代を迎えた日本国民の皆様にお祝い申し上げます。そして先月、日本列島を強打した台風19号ハギビスと、21号ブアローイによって多くの死傷者が発生して、精神的衝撃と被害を受けた日本の皆様へ深いお見舞いの気持ちをお伝えして、早急な回復をお祈

り申し上げます。

私は1963年、高校2年の時にMRA/ICと出会ってから現在まで、恥ずかしいことも、また力不足なことも多くありますが、私自身の変化を通じて社会を変えようとするMRA/ICの理念に合った人生を生きようと努力しております。このような私の人生の過程で20世紀後半に現れた国際化の急速な進展はMRA/ICの役員および青少年指導者である私にとって、未来世代の主役である青少年が世界平和と共同繁栄について認識する機会である国際協力の活性化のため、努力するきっかけとなりました。

一方で、グローバル時代の進展は東北アジアの青少年交流と協力においても非常に重要な意味を持つようになりました。1991年当時、社会主義の宗主国であった旧ソ連の崩壊で冷戦時代が終わり、中国の改革・開放が急速に行われたことで韓国と中国の両国間には協力と和解のムードが広がりました。その結果、1992年には両国が公式的に外交関係を樹立して、政治経済と社会文化など全般にわたって交流と協力が活性化され始めました。

当時、私は青少年分野も、中国との協力を急がなければならないという事実に着目して、中・韓の国交正常化1年前から中華全国青年連合会と協力し

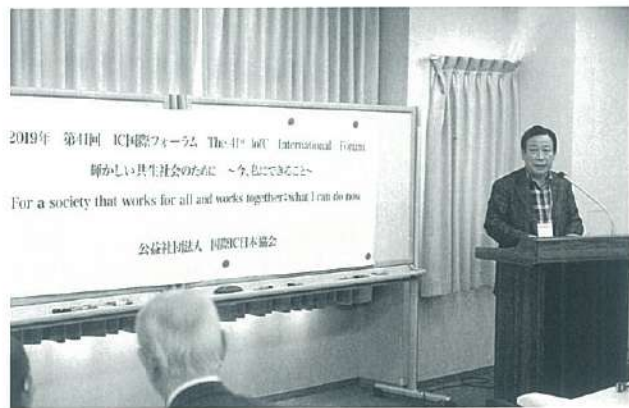
て、最初に中・韓青少年交流を推進し、協力基盤を設けたことに、今でも大きな誇りを持っています。

そして1980年に私の努力によって実現された日・韓青少年および青少年指導者の交流事業が、多くの難関にも関わらず現在まで安定的に進められている姿を見ながら、両国間の関係増進に寄与したという自負心も持っています。東北アジアの平和と協力は日中韓三カ国だけでなく世界平和と発展、そして共同繁栄のためにも非常に重要だと判断しました。このように重要な東北アジアの恒久的で未来志向的な平和と協力の為には、次世代の主役である青少年間の出会いと、理解のための対話の場を設けることが何よりも必要だと考えました。

その理由は、漢字と儒教的思想を媒介に数千年間、文化的共同体を成して、調和と協力の歴史を共有してきた日中韓三カ国が、近代まで続いてきた多くの戦争と葛藤で作られた不信の壁を越えられず、不安な平和を維持している姿を見ながら、次世代を担う青少年こそが出会いを通じて話し合う中で、過去の不幸な歴史に対する心のこもった謝罪と許しを通じて平和の道を共に進んでいけると考えたためです。

第二次世界大戦の終戦以降、スイス・コーで開かれたMRA/IC国際大会で、MRA/IC創始者であるフランク・ブックマン博士の仲介によってドイツの指導者たちがフランス指導者たちに戦時中に行なった非人道的で野蛮的な侵略行為について心から謝罪すると、フランス指導者たちはこれを心から受け入れて許したという感動的な実話は、相手に対する誠実な態度が持つ力の教訓をよく示しています。

私は今日の青少年がまさに東北アジアの未来志向的な調和と協力を通じて平和を創造できるピースメーカー (Peacemaker) だと考えます。青少年は過去日中韓三カ国の不運な近代化過程と太平洋戦争、冷戦時代を経験しなかった世代として、平和と共同繁栄の大きな青写真を描くことのできる真心を持っており、また青少年は相手に対して開かれており、創意的で、合理的な思考と相互理解を通じて、東北アジアの平和と繁栄を成就できると考えています。



私は50年間、多様な国際活動に参加しながら、日中韓三カ国の次世代である若い大学生たちと東北アジアの未来と平和について対話する機会を多く持ちました。そして東北アジアの平和と繁栄のため、微力ながらも努力する決心をして、2004年に「東北アジアの平和と繁栄のための青少年の役割」をテーマに、日中韓三カ国の大学生が参加した「第一回東北アジア青少年フォーラム」をソウルで開催して以来、今年に至るまで「東北アジアの平和と繁栄」「文化交流」「環境保護」「経済協力」「教育改善」など多様なテーマで16年間、続けております。そして一歩進んで、軍事衝突の可能性により緊張状態にある朝鮮半島の平和的統一によって、東北アジアの完全な平和の定着に貢献するために「東北アジア青少年フォーラム」に北朝鮮の青少年も参加できるよう、志を同じくする国内外の青少年団体と名望ある方々と共に努力してきています。

これとともに、最も近い隣国であるにも関わらず、過去の歴史と領土問題によって葛藤と反目が続き、最近になって極限の対決状態を呈する日韓両国関係の解決策を、次世代を担う青少年の視点で模索してみようと、東北アジア青少年フォーラムと連携して、2002年と2003年に続き2015年から「日・韓大学生討論会」も大韓民国国会で毎年開催しております。

俗に21世紀はNGOの時代だと言います。これは国家運営において民間市民社会の役割と機能が政府に劣らず重要であるという逆説的な表現です。私は東北アジアの恒久的平和の定着のために、日中韓三カ国の様々な懸案と、日韓両国間の問題を解決するにおいて政府レベルの努力も重要だが、自国の国民

の考えの変化を誘導し、社会的コンセンサスを形成するための NGO や NPO を中心とした民間レベルの努力がより需要だと考えます。

この第 41 回フォーラムのテーマは For a society that works for all and works together “What I can do now” です。社会は人間が自身の人生を完成していく美しい空間です。その一方で、他人と相互作用する中で、衝突しながら争いと誤解が生み出される否定的な空間でもあります。ここで各種犯罪と格差、道徳的欠如が発生して、これによって私たちの人生と環境が疲弊して、野蛮的で非理性的な空間に変わっていきます。そのため社会構成員である私たちはみな MRA/IC 運動の創始者であるフランク・ブックマン博士が主張された「人間性は変わることがある。これが解答の根本だ。国家経済も変わり得る。これは解答の結果である。人類の歴史も変えられる。これは私たちの時代的使命だ。」という言葉に深く受け止めて、これを生活で実践していかなければなりません。Quiet Time を通じて自己省察的な生活で毎日生きていくならば “What I can do now”、つまり私たちが共にする社会の為に私が何をすべき

で、また、他人と共になにができるのか？に対する答えを難なく見つけることができるだろうと考えます。

私は日韓大学生討論会と、東北アジア青少年フォーラムを通じて日韓両国の関係が改善されることを心から願い、ひいては我らの地球村が戦争と葛藤、憎悪、疾病、飢餓のない、愛と平和、そして幸せを常に共にできることを祈ります。私自身もこのために継続的に努力を尽くすつもりです。

最後に、毎年、大韓民国・ソウルで開催される日韓大学生討論会と東北アジア青少年フォーラムに積極的に協力していただき、今回の The 41st International IofC Forum に参加して東北アジア青少年フォーラムについてお話しできる貴重な機会をくださった矢野弘典会長をはじめとする国際 IofC 日本協会に感謝申し上げるとともに、この場を借りて、日韓両国の関係回復に向けて日本社会で更に努力して下さることをお願い申し上げます。

日韓両国は永遠の‘お隣’です。ありがとうございました。



国際 IC 日本協会 理事
成 豪 哲



1. 民間交流の重要性の再認識

今年は、歴史上最悪と言ってよいほど日韓政府の関係が険悪な状況であったため、そもそもフォーラムが開催されるのか、開催するとしてもどれほどの学生が応募するのかといった危機感が非常に強かった。しかし、蓋を開けてみれば、近年に例をみないほど、定員をはるかに上回る学生諸君の応募があり、厳しい書類選考の結果、最終的には 24 名の学生諸君が日本側参加者としてフォーラムに参加することとなった。これは、過去のフォーラム参加者の地道な努力の結果によるところが大きく、とりわけ今回の若手引率者である須崎純史君と本間麻友さんが、出身大学の学生に積極的な声掛けをして頂いた結果として、日本大学と北海商科大学から多くの学生が参加することとなった。これだけでもフォーラム自体は成功であったということができるが、周囲から様々な不安や反対の声があったにもかかわらず、勇気を持って参加した学生諸君には感謝の意を述べたい。これにとどまらず、学生諸君は、東北アジア青少年フォーラムに参加して、実際の韓国ソウルの雰囲気を感じ、また同世代の韓国の学生達と対話しながら、日本のマスメディアやインターネットの匿名投稿で言われるような状況とは全く異なる見識を有するに至った。私は、両国間の関係が困難である中でこそ、やはり民間交流が極めて重要な役割を果たすものだと改めて認識し、民間交流が人と人の交流を促進させ、草の根レベルで友好の輪が広がっていくきっかけになっているのだと実感した次第である。

2. 李柱榮韓国国会副議長との懇談会

今年のフォーラムの特徴は、日本の学生向けに開催された MRA / IC の理念のもとに政治活動を続けてこられた李柱榮（イ・ジュヨン）韓国国会副議長との懇談会である。先に述べたように、日韓政府の関係が最悪な状況の中で、忌憚のない意見交換ができたことは、普段、政治家との間で交流のない学生諸君にとって、非常に貴重な機会であった。懇談会に参加した学生諸君は、それぞれが考えている日韓の問題や韓国側で認識している政治情勢について、しっかりと考えて質問を行い、また、これに対する李柱榮副議長の答弁も率直で含蓄のあるものであった。このような、通常では考えられない外国の国会議員との懇談会は、まさに MRA / IC ならではのグローバルネットワークによって実現できる素晴らしい機会であった。

3. 後継者育成の重要性

今年のフォーラムの個人的な目標は、前年度よりもさらに後継者育成に重点を置くことであった。国際 IC 日本協会を含む世界の IC / MRA は、歴史的経緯を振り返ると、その一時点だけを見れば世代を超えて発展を遂げてみせたが、現在ではその点が線となることなく斜陽化が進んでいる状況である。今年は、過去のフォーラム参加者である須崎純史君と本間麻友さんの 2 名



に引率を依頼して、事前準備の段階から色々と企画、会議運営、記録、進行状況の把握などを担当して頂いた。

そのような中で、私自身は、「真に優秀なリーダーは、リーダーになったときから、次の後継者を発見して育てることに着手するものだ」と自分自身に言い聞かせて、このプログラムを持続可能な民間交流事業とするべく、自分なりに努力をしてきた。私自身がどのような努力してきたかといえば、とにかく表向きは「何もしないこと」を心掛けた。具体的には、若手の引率者が「自分達がやらされている」と感じないように、私自身は大まかな方針だけを示し、自分達で考えて自主的に活動できるようにかなりの裁量を持たせて、足りない部分は適宜フォローしながら、経済的支援が必要などときには惜しみなく支出した。

ここにいう「何もしないこと」とは、本当に何もしないのではなくて、積極的に「何もしないこと」であり、注意深く“watch”するものの、我慢強く見守ることであり、それが若者に対する最善の投資であると考えたからである。私は、今の日本の社会でも、若者にこういった投資（経済的支援はするけれども、何もしない、口は出さない）を我慢強く続けることが必要なのではないかと考えており、日本のシニアの方々にもぜひ実践して頂きたいと考えている。

以上



東北アジア青少年フォーラム 2019/11/08

須崎 純史 氏

参加感想：この度、引率者としてフォーラムに参加させて頂き3年前学生の頃に参加した時と異なる視点でフォーラムを知り感じる事ができました。どの立場で参加させて頂いてもこのフォーラムは本当に素晴らしい場だと思います。もっと多くの方に知ってもらい参加してもらいたい、そしてフォーラムの内容自体もより良いものにしていきたいと思っています。

討論について：各国の論文共有の前倒し。今後より深い議論を行うために論文の事前共有をもっと早く行う。

- ・グループ分け討論の円滑化。フォーラムの始まる2週間程前にどのような形式でグループ別討論を行うか共有できると準備の円滑化につながる。(ファシリテーターどうするかも含めて)

学生の募集（日本において）

- ・リファーマル強化 ⇨ 過去のフォーラム参加者に、同級生や後輩、先輩にフォーラムの勧誘を依頼。
- ・募集開始の早期化 ⇨ 告知を1ヶ月程前倒しをおこない募集活動の時間及び論文作成の時間をとる。
- ・大学への営業 ⇨ まずは首都圏の大学の国際関係サークル、事務に対して宣伝活動を行う。
⇨ 参加者の質向上、多様性、ブランディングを目指す。

日本学生のチームビルディング

- ・参加学生の主体性を育むための仕組み作り、プログラム作成
- ・参加学生同士の交流頻度を増やしてもっとフォーラム前に仲良くなる。
- ・エントリーの時に事前ミーティングは必ず出るという条件追加。⇒フォーラムのプライオリティを上げる。

将来のビジョン：東北アジア青少年フォーラムの過去の参加者が一同に集まる同窓会の開催によりフォーラムのブランディング、人的交流を活性化。



国際基督教大学 2年 石ヶ森 祐 氏

参加感想：私は今年の夏に韓国で行われた東北アジア青少年フォーラムに日本側参加者として参加した。本文章では現地での学生との話し合いと交流の中で生まれた自分自身の変化についてまとめる。

想像と現実の違い：

- 日韓関係が最悪な時期に行き、不安もあったが実際行ってみるとテレビで見た風景と違って驚いた
- 中韓関係に関する自分の知識がなく、普段得ている情報がいかに主観的であるかを再確認
- 自分の目で確かめる大切さを学んだ

三国間で仲良くできるなという実感

- 生活を共にするという貴重な機会を得られた
- 違いがありつつもそれを理解しあえるという確信を持たた
- ナイトミーティングでみんなの本音を聞き、お互いに仲良くしたいという気持ちを強めることができた

討論をしてみてどうだったか：政治に関する興味関心の違い

- 政治に関しての興味関心が薄いのと共に自分の生活に関わってるという自覚の薄さ
- 専門的な話になればなるほど中韓学生の意見が多くなり、もっと勉強すべきだったと感じた

他の人の意見を引き出す大切さ・難しさ

- ナイトミーティングの際のみんなの素晴らしい想いを聞いて、もっと昼間の会議から相手の思いを引き出したいと感じた
- バックグラウンドが全く異なる中でお互いが納得しあえるような結論に至らせるのが難しかったが、それができた時の達成感もすごくあった
- いい意見を思い浮かぶためにも聞き上手になろうと感じた



*はじめに：自己紹介

東芝に入社後 20 年間は職場にいましたが、仲間の推薦と、人々の為に活動したいとの思いから労働組合運動に参加をしました、当時は労使紛争が多く、春闘という言葉が流行しておりました。毎年春にストライキが行われ、会社は操業・生産が止まり大きな痛手となっていました。組合員はストライキで給料が減額されますから、労使双方共にストライキが無意味な行動と少しずつ考えるようになっていました。こんな時、小さな支部の書記長の私に、労組本部から「MRA に行ってみないか」と誘われました。

それまでは大先輩が参加していたので、若い私が推薦されたことに驚きました。聞く所によると「MRA は禁酒・禁煙と大変窮屈なところ」という先輩の言い伝えがありました。しかし、会議に参加をすると普段私たちが忘れかけていた人生観などを真剣に、通訳の藤田さん・長野さんと話していると、自分は組合員の先頭に立ってハチマキをしてストライキをしていれば正義感と思っていたことがそれでいいのか？気が付きました、同じテーブルでいろいろな国の人と話せば解り合えるということに気づきました、考え方が変わってきました。

組合員と家族に共感される組合を目指して

組合に戻り自分の気づきを伝えなければならないと思いました。労使協議を重視した労使関係を築き始めよう、労働組合の学習会は講義型、演説型の詰め込み型を執行部と組合員が一緒になって参加型に

しました。山の中の研修所では、ジャージを着て外で日が暮れるまでゲームなどをしました。顔も名前も知らない人同士が名前、顔を覚え和気あいあいとなり、一体感が生まれました。夜の勉強では、まず気づき大切とグループごとに、与えられたテーマを考えることから始めました。支部で、書記長を 10 年間、委員長 8 年間努めた中でこんな改革から始めました。

会社で管理者、経営者になっている人たちの中で、組合活動を体験し、社会学・労使関係・人間関係を学んだ人たちがいます。何か自慢話のようになってしまっていて恐縮ですが、MRA/IC のおかげで今の私があるのだという感謝する気持ちで申し上げたいと思います。MRA の古い資料の中に私がスイスコーで調理をしている写真がありました。その時、地元の調理場の方に声をかけられました、食事の時間に会場ではなく調理場の食事に招待したいので調理場に来て欲しいと言われ参加しました。この時、「あなたは東芝だと聞いたが Mr 矢野は元気か？」と聞かれました。何度かコーに見えていた矢野さんに次いであなたが調理場の食事に招待した日本人では 2 人目であると言われました。スイスのコーに最初に行った時は 1982 年、第 49 回産業人会議世界大会でした。35 歳で今から 40 年前になります。ここでは心を洗われ、自分の歩むべき道標、リーダーシップとはどのような行動が良き方向に持っていくかという考え方に気づきました。

ストライキ至上主義から、労使協議性へと時代も変化してきました。労使が同じテーブルに着く時はお互いの立場は対等です。生産で協力、分配で対立という言葉があります。当時は低賃金の日本は

欧米並みの賃金を目指しておりました。ストライキをして給料を少しずつ上げていくというのではなく、最初から本音で行きましょうという路線を私たちが仲間と築き、労使対等、相互信頼、徹底した事前協議、生産状況（会社状況）を組合員に伝え、ともに考えるという事で理解を示す労使協議性でストライキがなくなって来ました。そのうち国鉄動労、現業官公労も民営化されてきました。昔は春になると交通機関が止まることも当たり前でした。私も一度、東芝時代に国鉄動労神奈川県本部で駅長さん、助役さんも交えて、労働組合員の方たちに労使協議性についてお話をした時がありました。民営化に向けての勉強会でした、生産性活動、ZD運動、QC活動など民間からすれば当たりの労使関係でしたが動力車労使にとっては耳新しい話と聞きました。

2 度目のコー訪問

2度目のコーは13年後の1995年でした。東芝組合本部副委員長の立場で会社側3名、組合側3名の副団長として行きました。この時のコーでは藤田さん・長野さんの出迎えを頂きました。夕食後コーの駅の隣のレストランでは藤田さんと会話をし、私の今のスタンスをお話しました、学習会も講義型から、参加型へ変える、行動や組合員との行事も家族ぐるみに変えていく等の4つのお話をしました。藤田さんがそれは体験から実践へ変る事への大変良い話だ、明日の朝の全体会議で話してほしいと進められて、お話をしました。

四つのイニシアチブを紹介

1つ目は、地域住民とボレロ演奏をする会です。組合だけではなく地域の川崎市民、会社、労働組合が一緒になってボレロ演奏をする会を作り今も続いています。子供は宝である、出来ることをするということから1000名の演奏会、幼稚園児から社会人で楽器を持ち寄り演奏し歌っています。

2つ目は、花いっぱい運動です。私たちの工場の

周りには緑があり花壇には花が咲いていましたが、組合員が花をいっぱいにすることを提案しました。

組合員は昼食後には花植え、草取り、水やりに参加し花がいっぱいになりました。

3つ目は、夜の親子の山歩き行軍の企画です。分かりづらい道には懐中電灯を持った案内が立ち、三々五々、子供と父親は山歩きをしました。山を下りた山小屋には母親たちがご飯を用意しているというものです。父と子も絆が深まる良い機会となりました。

4つ目は、カンボジアに学校を作るということです。カンボジアに学校を作ろうという話を35年前この国際会議場で知りました。ベトナム戦争、ポルポト派の国民への虐殺もあり大変な国・地域でした。

和平後、子供たちに何かして挙げたいと思う時に、同じ神奈川に小山内美江子さん（3年B組金八先生の脚本家）が難民支援のリーダーとしてJHP代表して活躍されていました。当初は難民を対岸から救助されており帰還が始まってからはカンボジア側で受け入れを考えていました。現地に学校を作るには350万円で5教室ができるということでした。お話を聞き即5月にはカンボジアを訪れ7月の労組大会では募金を呼びかけました。組合員は6万人いましたから一人100円でも600万円が集まるのではないかと思ひ付きました。総計800万円が集まり学校を作る資金と30人の組合員代表と贈呈式に参加出来ました。参加者は何かボランティアをやりたい気持ちで参加しましたが、むしろカンボジアの皆さんから親切で優しい心の持ち方を体験し忘れていた優しさや笑顔を体感し教えられて、帰国しました。今はJHP・学校をつくる会というボランティア活動を続けています。ボランティアはお金が掛かるので私は個人で会社を経営しながらボランティアを続けておりますがこれが私の生き甲斐となっております。

JHPの活動

ここでJHPのことをお話します。JHPはできることからはじめようというタイトルです。25年間に

370 棟の学校を寄贈できました。当時 5 教室 350 万円でしたが、現在は 1000 万円が必要です。ある会社は毎年寄付をし、贈呈式に社員を出席させ社員教育に繋げている会社もあります。山田養蜂場がその例です。最近ではカンボジアだけではなくネパールにも学校を寄贈する運動をしています。音楽教育、美術教育も必要とされていますが社会科の授業の中で簡単な音楽、美術、を組み入れています。中学校を出たらもう先生であるという時代もありました。

今では師範学校も出来ました。現地 JHP プノンペン事務所には日本人 3 人の駐在員、6 人の現地人が働いています。私たちは初めから伝手があり、現地の大工さんと直接契約しましたが村の役人に学校作るからと寄付金を渡したが、柱しか建たないという例も聞きます。教育省の役人も変わり美術、音楽を取り入れるようになった時に、日本に白羽の矢が向けられました。JAICA も経験がないということで JHP に教科書、先生方の指導要項を作るよう要請がありました。8000 万円の資金が用意されています。

今は多くのボランティアでハード面に加えソフト

面でもカンボジアを支援しています。小山内美江子さんの影響で、金八先生のつながりで芸能人の支援もあります。幸せの子供の家というプログラムもありますがゴミ山に住んで働いている子供たちの中から孤児院に入れ、学校に進ませ、留学の機会に恵まれる子供たちもいる CCH という活動もあります。

海外のみならず国内各地の災害地の支援も日頃のボランティアの活動のノウハウを役立てており個人ではなく組織としての活動の芽も出ています。将来、観光で売り出す地域となるよう名所作りにも手を貸したいと南三陸町には三島ザクラを植林し 4 年目を迎えることになりました。来年は花見ができるまでになりました。4 つの誓いは 2 度目のコーに参加した時に朝の集い全体会議でお話をする機会を頂きその内容は各国の皆様にご日本の労働組合はチェンジしたと報道されびっくりしました。

終わりに私の宝物は何かと聴かれますとそれは多くの友人です。MRA・IC のお陰様で心の持ち方、良き人生を歩むことが出来ました、心から感謝しています。

◇◇◇◇◇ 第 41 回 IC 国際フォーラム」ワークショップ ◇◇◇◇◇ 「JAPAN I CARE」の実施報告

JAPAN I CARE (日本を大切に) :

この WS は、インド IC で“INDIA I CARE (インドを大切に)”のタイトルで、若者たちを対象に取り組んできた実績がある。今回はラオ夫人が主導し、インド IC で訓練を体験した山本愛さんがアシスタント役を務めた。もともとの狙いは、インド IC がインド再生のために、「インド人の行動を変えよう！」という、個人のイニシアティブを重視する活動である。

寸劇：「束縛からの自由」をテーマとする青年男女 4 人による寸劇が披露された。内容は、家族間に於ける「愛」と「愛着・執着」を描いたもので、一方は人間を自由にさせるが、他方は人間を束縛してしまう。人間は束縛や執着から解放されて自由になったとき、人生の意義・目的・理想に気付く。これを象徴的に描いた寸劇である。



佐々木 淳氏

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ アクティビティの様子 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「異文化コミュニケーションを学ぼう」

- ・イラストを用いて自己紹介しよう！
A3用紙を4つに分けて、イラストを描く
この用紙を持ちながら①～④の自己紹介！
 - ①子供の頃のニックネーム！
 - ②今日は〇〇から来ました！
 - ③私の好きな動物は〇〇です！
 - ④私の星座は〇〇です！
- ・共通点探し（イラストを描きながら）
グループで共通のことを見つけよう！

グループの自己紹介の様子的一端は以下の写真をご覧ください！



ファシリテーター



イラストの説明に耳を傾ける！



チョン ヨンヌク氏



バーバラ女史 皆楽しそう！



車 総裁

事務所所在地 〒 160-0004 新宿区四谷 4-28-20 パレ・エテルネル 206 号

公益社団法人 国際 IC 日本協会

電話：03-6273-1428 Fax: 03-6273-1429

ホームページ：http://iofc.jp

